



GLOBE

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp>

国際文化研究科 広報
PUBLIC INFORMATION MAGAZINE

No. 29

October 2016

CONTENTS

- 02 研究科長メッセージ
- 03 講座紹介
アジア・アフリカ研究講座
国際政治経済論講座
応用言語研究
- 06 前期課程・後期課程修了者からのメッセージ
亀山 博之
ロイケオ スィリアチャー
矢島真澄美
鹿島 大雄
王 偉
- 09 新任教員紹介
山内 玲 准教授
朱 琳 講師
妙木 忍 准教授
池田 亮 准教授
- 11 研究紹介
小原 豊志 教授
小野 尚之 教授
- 13 最近の著作から
坂巻 康司 准教授
江藤 裕之 教授
- 14 平成28年度科学研究費補助金採択一覧
- 15 INFORMATION
オープンキャンパス2016報告
平成27年度外交講座報告
第22回国際文化基礎講座
第23回東北大学国際文化学会総会開催報告
講演会報告(1)
講演会報告(2)
- 16 研究科入試情報



◆ 研究科長メッセージ

国際的な文化のパワー

国際文化研究科長 黒田 卓



東日本大震災の発生から、早いもので5年半余りの歳月が流れました。これを契機に日本列島も今年の熊本地震に代表されるように大規模な地震が頻発し、加えて気候変動にも影響されて広島での集中豪雨による土砂災害のような大きな自然災害に度々見舞われる

ようになっていきます。こうして多発する災害の情報があふれる陰で、福島原発事故を含む震災の傷跡や復興の足跡は、メディアのカバーも少なくなり忘れ去られたと言って過言でないほどに注目度が下がっている印象を拭えません。

しかし被災地にある大学に働き学ぶ者にとっては、かけがえのないものを喪失した被災者はもちろん、震災を経験した多数の人びとにとって、心の痛みは歳月の経過だけでは癒されるものではないことが実感されます。私たちの研究科もその渦中にありました。日々の教育研究活動がダメージを受けたのみならず、その営みの場にさえ大きな、目に見える傷跡が長く残っていました。ようやくその損壊や亀裂の痕跡がなくなったのは、耐震補修工事が研究科棟で一応完了した2年前のことでした。

研究科棟の補修工事と歩調を合わせるかのように、本誌前号でもお知らせしましたが研究科の教育研究組織の本格的な改編にも取り組みました。従来の3専攻を1専攻に統合し、16講座を大きな括りの8講座に再編したこの改組の背景には、種々の要因があったかと思いますが、それを主体的に進めた当事者の一人として忘れてならないと思うのは、国際文化研究を取り巻く時代の要請が大きく変容しつつあったということです。

好むと好まざるにかかわらず、否応なく進展するグローバル化の現代。何よりもこのグローバル化の時代において、

それに学術的に応答できる教育研究体制の立て直しと、そこで育成される(べき)人材のありようの再定義が求められていました。これは、経済のグローバル化に伴い、地球規模でのメガ・コンピティションで勝ち抜く、英語が堪能でグローバルスタンダードを体現する即戦力人材を養成するということだけを意味しません。

国家の役割はいまだに重要ですが、他方であつたように国家と国家の間、つまり国際的(international)な次元だけで物事が円滑に進んだり、解決したりする時代でもありません。情動的にも、また物理的な手段においても、人類が(政治の壁を別とすれば)国境を超えるのはいとも容易になってきているからです。例えば、一昔前は、半年もかかって研究に必要な書籍を海外から取り寄せていましたが、いまや瞬時にネット上で閲覧もできますし、文献も2週間もすれば地球のどこからでも届くことが可能な時代です。

けれども恩恵ばかりではありません。文化の摩擦・軋轢に起因するような深刻な事態や地球規模での対応が不可欠な問題も日常的に生起しています。したがって、いまや旧来の国家間の外交・コミュニケーションのみならず、国家を超えるレベル、あるいは国家の下に元来はあった中間団体や市民のレベルでも、グローバルに思考し、共感的な理解に立ったコミュニケーションが図れる能力が必要とされていると言ってよいと思います。とくに異なった文化を理解し、自文化を発信できる、しなやかな感性と能力が大事になっています。

近年では、日本の外務省ホームページ上でも、軍事力や経済力などの「ハードパワー」のみならず、自国の文化や価値観の魅力や誘引により他国の市民の共感・協調を勝ち得る「ソフトパワー」の重要性が注目され、またその担い手として国の機関だけでなく個人にいたるまでの多様なアクターが大切であることが特筆されています。私たちの研究科は、こうした時代の変化に当たって、日本人学生、また留学生の双方に、専門的な研鑽を積んでいただくと同時に、国際舞台の上で「ソフトパワー」のアクターまたはアクトレスとしても大いに羽ばたいていってほしいと期待するものです。

講座紹介

アジア・アフリカ研究講座

当研究講座は、主に2つの地域の今日的な実態を解明する目的で設立されました。1つは、東南アジアから北アフリカまでの非常に広い範囲にわたって分布するイスラーム地域です。イスラーム地域は、近代に至るまでアジア・アフリカ地域の紐帯を維持する役割を果たした反面、摩擦を引き起こす原因ともなってきました。イスラーム地域の特性の実証的な研究が今こそ求められています。第2には、いまや超大国となった中国という国家を中心とする地域です。世界の政治経済を牽引する中国の発展の基層は、逆接的なようですが、むしろ歴史、文化にこそ求められるのではないのでしょうか。このような観点から、21世紀のアジア・アフリカ地域における中国のプレゼンスについて考究することが重要だと考えます。

本講座に所属する学生は、日本人学生と（主として中国からの）留学生からなり、変革期のアジア・アフリカを、イスラーム地域あるいは中国の歴史と文化に着目しつつ、研究を進めています。いまだ体制移行途上のため、旧講座の学生も含めて研究テーマをあげますと、近代イランにおける比較都市研究や中国ムスリム女性の教育文化、南北朝時代の日本における中国古典文学の受容、明代の小説『三言』に見えるさまざまな女性観、19世紀後半から20世紀前半における日中文化人の交流、日中の小説の比較、中国の作家、思想家が実践した近代西洋思想の受容、女性論、翻訳論、身体観など、時代も地域もテーマも、実にさまざまであることがわかります。



対する教員はアラブ、イラン、中国を専門とする3名と、ややコンパクトな体制でしたが、本年度から近代中国思想を専門とする中国人教員を一名迎えて、パワーアップしました。

学生たちは、毎週実施される演習形式の授業や講座教員の担当する講義、年に数回実施される図書館の文献探索講座や稀覯本閲覧会（写真参照）などを通じて、それぞれの研究だけでなく、お互いの研究を批評することを通して研究スキルを高め、研究の精度をさらに高めるにはどうしたら良いかを日夜追求しています。演習形式の授業では、教員・学生数に比してやや手狭な教室で、発表された内容に対して、全員参加で質疑応答をすることを心がけています。



国際政治経済論講座

現代国際社会においては「国際政治」と「国際経済」が一層分かちがたく、密接に関わり合うようになってきました。このような目まぐるしい変化の本質は従来の政治学・経済学の枠組みを越えて複合的な視野に立ってはいじめて理解することが可能です。国際政治経済論講座ではそうした複眼的な思考に立ちながら先端的で新たな知を構築し、グローバル化のなかの日本とアジア、日本とアメリカ、アジアとアメリカ等の政治経済関係にフォーカスを絞り、世界をリードする教育研究の遂行を目指します。

国際政治経済論講座は、国際市場における諸産業の競争、貿易、金融・投資、地域経済統合、世界経済体制など、これまで国際的な経済関係の分析と、安全保障、地域紛争、ナショナリズムなど変化の激しい国際環境での国際政治関係の分析を行い、政治・経済両面の密接な国際的関わり合いを解き明かすための教育・教育研究を行なう講座として編成されています。本講座では政治学、国際関係論、経済学等の社会科学の知識を応用し、国際的な政治と経済の現象を洞察する力を培う教育プログラムを提供し、現代国際社会の複雑で多様な現実問題を解き明かすための広範な知識と独創的な分析能力を備えた人材の育成に努めます。

より具体的には以下のテーマで研究を行なってきました。

○ 移行経済における生産手段の私有化

経済制度の移行を進める諸国の直面している重要な課題の一つが生産手段の私有化です。これまで、ケース・スタディーやアンケート調査に基づいた統計分析等で移行経済における私的所有の変容を比較研究してきました。

○ 経済発展における金融・資本市場の役割

発展途上国の経済開発と安定的経済成長にとって金融市場・資本市場が無視できない役割を果たすという指摘がなされます。その指摘の妥当性を検証するために、途上国の工業化と金融市場・資本市場との関連性についての研究を行っています。

○ 東アジアの国際関係における規範やアイデンティティの重要性

東アジアの国際関係を特に専門的に研究しています。東アジアとは、日本や中国、ASEAN（東南アジア諸国連合）などを包括する地域ですが、この地域では「国家間の協力」を求める規範や「東アジアの一員」としてのアイデンティティが、地域協力の原動力となっています。そこで、東アジアの地域の国際政治の動きを捉えるにあたり規範やアイデンティティといった要因に関心を向ける「構成主義（constructivism）」の立場に立った研究を行なっています。

○ 冷戦と脱植民地化の相互作用についての研究

北アフリカと中東の国際政治史を題材に、冷戦と脱植民地化の相互作用について研究しています。第二次世界大戦以前には第三世界の多くは西欧の植民地支配下にありましたが、冷戦期に相次いで新興国が独立を果たします。この過程で米ソ、および西欧諸国の間でどのような国際関係が展開され、新しい国際関係を作り出していったのかを研究対象としています。これは、先進国と途上国の間での大きな経済格差といった問題を作り出す原因となったものであり、極めて現代的な国際政治的、国際経済的問題とつながる視点です。

○ 貿易面とマクロ経済面から見た国際経済関係の研究

貿易面の国際経済関係では日本での関税引き下げや貿易自由化の効果について、日本の通商政策が戦略的性格を持っていたか等に関する実証研究を行なってきました。マクロ経済面での国際経済関係では、経済政策の国際的な相互依存と波及過程、為替相場決定におけるマクロ経済政策や為替リスク分担における経済規模の格差の役割等に関する理論モデルによる分析、そのシミュレーションによる数値解析、計量経済学による実証的な研究を行なっています。

■ 応用言語研究講座

応用言語研究講座では、関連する諸科学・技術を応用して言語研究を進め、その研究成果を言語教育に活用しています。講座の名前が示すとおり、「応用」が研究のキーワードになっています。また、研究の入口部分でも、研究の出口部分でも、窓口は外の領域に向かって広く開かれています。

教員の研究内容は次のとおりです：①コンピュータ言語学と認知科学の方法を取り入れた文法研究と日本語教育、②コーパス研究とそれを応用した英語教育、③言語教育学研究を基礎にしたスペイン語教育と言語教師教育、④ICTを応用したドイツ語教育、⑤高等教育研究（教授法、評価、質保証、職能開発）、⑥第二言語習得研究とバイリンガル教育、⑦機

能主義的・認知主義的な言語理論を基礎にした統語論・意味論に関する対照言語学的・言語類型論的研究、⑧第二言語としての日本語の習得研究と日本語教育。

応用言語研究講座の教員は、東北大学で日本語、英語、ドイツ語、スペイン語などの語学教育に携わりながら、研究成果を教育に活用し、教育から研究へのフィードバックを心がけています。当講座では、言語の研究と教育とを密接に連携させながら、応用言語研究の新しい地平を拓いていきます。



◆ 前期課程・後期課程修了者からのメッセージ



アメリカ研究講座
平成28年3月
博士課程前期2年の課程修了

亀山 博之

考えること、 学びの場

子どもの頃の私は、トム・ソーヤーさながらに遊ぶことは大好きだが学校が嫌で、大人になったら一刻も早く学校とは無縁の生活を送りたいと願っていた。にもかかわらず、私は人生の大半を学校という場で過ごすことを自ら選んだ。この春、国際文化研究科の博士課程前期を修了し、引き続き後期課程へ進学した。私は学生であると同時に社会人でもある。非常勤講師として地元の大学に勤めながら研究活動を行う日々だ。子どもの頃の願いとは裏腹のこの長い「学校生活」に自分で驚きつつも、心は充実感に満ちている。

私の研究対象は、19世紀アメリカの思想家エマソンである。学部以来、私はエマソン研究に取り組んでいる。エマソンと私を結ぶきっかけ、それは実はビートルズである。私はポール・マッカートニーが来日すれば、全クラスを休講

にしてでも追っかけをせねばならぬと考えるほどビートルズを「信奉」しているのだが、特に関心があるのが、ビートルズとインドとの関わりである。メンバーであったジョージ・ハリソンがなぜヒンドゥー教に傾倒したのかという素朴な疑問が、私の研究活動を始めるそもそものきっかけと言ってよい。インドに目を向けた西洋の先達が同じように他にもいたはずであると考えたとき、私はまずソローに出会い、そして、その師匠であったエマソンに出会ったのである。以来、疑問が次の疑問をよび、私の研究生活が続いている。

「この世界で最も困難な仕事とは何であるか。考えることだ。」これはエマソンの1841年のエッセイ「知性」からの一節である。研究に取り組んでいると、誰もがこの言葉の意味を痛感するはずだ。だが、国際文化研究科というこの学びの場で、指導してくださる先生方や志を同じくする仲間恵まれた中、考えるという最も困難な仕事に存分に携わることができる喜びを感じると、「学校」に長くいることもまた幸福であると、いま思うのである。



言語文化交流論講座
平成28年3月
博士課程前期2年の課程修了

ロイケオ・
スィリアチャー

人間は 常に成長する

子供の時から、読書が好きで、初めて読むことができた本は『窓ぎわのトットちゃん』のタイ語版でした。それから、日本語を勉強して、日本語原作の小説や漫画が読めるようになって、日本語原作とそのタイ語版を見ると、色々な違いに気づきました。その違いを明らかにしたいというのが私の研究のはじまりです。研究テーマは「翻訳作品から見た日本語とタイ語の一人称表現の対照研究—漫画における役割語を中心に—」です。日本語は「おれ」「ぼく」「おら」「わたくし」「あたし」等様々な一人称表現があり、英語に訳す時は「I」と訳せばいいでしょうが、タイ語では、日本語と同じく一人称表現が多いです。しかも、タイ語も日本語と同じよ

うに“ラック ナ”(=愛するよ)等一人称表現を非明示にすることができます。研究課題は一人称表現の種類と使用頻度を調べ、その共通点と相違点を明らかにし、その裏にある要因を探ることです。

ここまでは研究に対して、格好つけて熱く語りました。しかし、実際に研究をはじめると、たどたどしい日本語はともかく、言語学の基礎の知識がない自分は他の人より努力を要します。「がんばっぺし」と自分に言っても、「もうだめだ、頑張っても、うまくできない」等くじけそうな時が何回もありましたが、その時に「人間は常に成長する。」という指導教官の先生の言葉を思い出し頑張れました。今できなくても、いつかできるって信じるのが私の励ましになっています。タイでは、先生は「第2の両親」という言い方があります。日本でも、まさにその通りだと思います。本当に心から感謝しています。タイの家族と離

れていますが、第2の両親、講座の皆さんは兄弟のような感じなので、仙台にもまるで家族がいるようです。先生方はもちろん、タイにいる両親、日本のホストファミリー、仙台で出会えた人達の支えのおかげで、無事に卒業することができました。

現在は後期課程に進学し、これから、色々大変だと思いますが、一生懸命研究することにより、自分を知ることでもできると思っています。そして、研究を通して成長していければと思っています。



比較文化論講座
平成27年9月
博士課程後期3年の課程修了

矢島真澄美

自分自身と向き合うこと

私は、どちらかといえば、大雑把な性格です。しかし、一度目標を設定すれば、その目標を達成することに集中します。良く言えば、自分で決めたことは最後までやり遂げますが、時に粗が目立ってしまうこともあります。博士課程前期・後期での時間は、そのような自分の性格と対峙し続けた日々だったと思います。

古写真の研究がしたいと思い、東北大学大学院国際文化研究科に入学したばかりの頃、横浜アルバムや明治日本というような漠然としたテーマしかなく、自分の研究を始めることが出来ずにいました。そのような時、長崎大学附属図書館に大量の古写真が所蔵されていることを知りました。それが私の研究の始まりでした。長崎大学で、ステレオ写真を見つけたのです。立体鏡という特殊な眼鏡にステレオ写真を設置し覗いてみると、立体的な明治日本の街並み、風景や当時の人々が写っていました。今にも動き出しそうなほど立体的で鮮明な画像に、とても感動しました。この時、私は博士論文を書くことを決めたのです。

「博士論文を執筆したい」と先生に相談したのは、博士課程後期2年の春でした。先生は「博士論文を書く覚悟が本当にあるのか」と何度も私に尋ねました。研究を続けていく中で、新しい発見があった時は、研究に弾みがつきました。しかし、研究結果をまとめて文章にする段階になると、「何を書いているのか分からない」と先生から何度もご指摘を受けました。時には同じ文章についての指導が数ヶ月に及ぶこともありました。論文を執筆することは、自分の大雑把な性格と徹底的に向き合うということの意味していたのです。研究は緻密に行い、読者に伝わるように丁寧に文章を書かなければならないという基本的なことを私に理解させるために、先生は忍耐強く指導してくださいました。

博士論文の執筆中は、「こんなことも自分には分からないのか」という反省と情けなさで眠れない日々は弱音を吐くことばかりでした。しかし、研究をやめようと思ったことは一度もありません。なぜなら、私にとって「自分自身と向き合う」ことが研究者としての第一歩であり、それができなければ先には進めないと思ったからです。幸運にも、私にはそのことに気付かせ、また精神的にサポートしてくださった先生方がいました。これからも自分自身と向き合いながら、研究を続けていきたいと思っています。



国際資源政策論講座
平成28年3月
博士課程後期3年の課程修了

鹿島 大雄

文系・理系の垣根を超えて

学際的研究の重要性は日に日に高まっています。学際的研究とは、1つの学問分野だけでは解決が困難な研究課題に対して、複数の学問分野を融合し、課題を解決する研究です。近年、学際的研究が注目を浴びるようになった理由は、環境問題や人口知能の開発など、1つの専門分野を学ぶだけでは対処できない問

題が表面化し、その解決が喫緊の課題となったためと考えられます。

私が博士後期課程で取り組んでいた研究もこの学際的研究に分類されます。博士論文では、石炭の主要生産国であり石炭火力発電に依存するモンゴルにおいて、発電プロセスの副産物として大量に排出される石炭灰の有効利用が進まないという課題に着目し、社会学的手法及び物理・化学的手法を融合し、現地に適した方法で石炭灰を有効利用するための基礎的検討と技術開発を行いました。

ただ卒業までの道のりは険しく、苦しいも

のでした。私は修士課程で有機化学を専攻しており、化学分析は得意でしたが、社会学に関する知識はゼロに等しく、苦勞の連続でした。しかし、見捨てず指導して下さった多くの先生方をはじめ、本当にたくさんの方々の支援があり、博士論文を完成することができました。

私が思うこの研究科の強みは、(1) 学際的研究ができること、(2) 海外の文化に触れる機会が多いことだと思います。まず、(1) についてですが、私が所属していた講座には、文系・理系両方のバックグラウンドを持つ先生方が

多く在籍しており、研究課題の解決に向けて様々な視点からのアプローチが可能です。(2) についてですが、様々な国の留学生が多く在籍しており、日本にいながら外国の文化に触れる機会がこれほど多い研究科は日本でも珍しいと思います。私は留学生と生活する中で、自分の意見をしっかりと伝えることの重要性を学びました。

学際的研究や外国の文化に興味のある方はこの研究科で学生生活を過ごしてみたいでしょうか。貴重な経験ができると思います。



言語応用論講座
平成28年3月
博士課程後期3年の課程修了

王 偉

四年の院生生活

はじめてこの「杜の都」にある東北大学に来たのは雪が降り続いていた寒い2012年2月のことでした。正直に言いますと、坂道に位置するちょっと古びている川内キャンパスを実際に参観して、東北大学に来るかどうかを一瞬迷いました。今振り返ると、ここに来た理由は二つありました。一つ目は、この大学は魯迅が留学した学校だったということです。二つ目は、いい先生がいることです。当時、東京大学と神戸大学にチャレンジしましたが、結局受け入れてもらえませんでした。日本語学校にもう一年通うか、中国に帰るかという選択をしなければならない2月下旬、ほかに募集する大学院がほとんどないと思って落ち込んでいた時、東北大学国際文化研究科の二次募集の情報を知り、これが最後のチャンスだと思い、素早く書類を出しました。鈴木美津子教授と連絡をとった際、とりあえず受験してくださいと勧められました。今でも、捨て猫、野良犬みたいな私を拾って、そして全力で育ててくれた鈴木美津子先生、佐藤研一

先生をはじめとする先生方、またこの研究科に感謝する気持ちでいっぱいです。

この研究科の最大の魅力は、学生と先生が対等に渡り合え、学生数の少ない環境で研究に打ち込めることです。この研究科は研究に集中できる素晴らしい環境だと感じています。わたしの所属した言語応用論講座(旧)は院生数がとても少ない講座でしたが、院生間のつながりは緊密で、研究や生活の相談をしやすいところでした。演習も少人数で行っていましたが、かわりに意見や助言を倍以上いただきました。また、教員や学生の専門分野が幅広く、また多国籍であるということも特徴的でした。ここで、広く国際的なセンスを持った、自分の分野以外の方からの意見が得られたことも、自分の論文の執筆において大変有益なことと実感しました。

この研究科での4年の院生生活は、バイトと研究を両立してきたつらさを味わったと同時に、達成感も感じられる充実した4年でした。今は専門研究員として働きながら就職活動をしています。残り少ないこの研究科にいる日々を精一杯に過ごしたいと思っています。この国際文化研究科で勉強したことを一生の誇りに思っています。

◆ 新任教員紹介



ヨーロッパ・アメリカ研究講座
准教授

山内 玲

2016年4月にヨーロッパ・アメリカ研究講座に着任した山内です。専門はアメリカ小説です、とかつては言っていたのですが、スペイン語圏の中南米の文学も研究対象の視野に入れるようになり、アメリカ合衆国の小説を専門としています、と長たらく自己紹介することになった次第です。とくに文学作品に現れる人種問題をテーマとして研究してきており、作品を取り巻く社会的文脈を視野に入れつつ、ある時代・ある社会の産物であるという小説の、言語芸術である所以に焦点を絞り議論することを旨としています。

前任校では教育学部で主に教員志望の学生の相手をしており、国際文化研究科という学部を持たない独立大学院に所属することとなり、院生の指導というのは大変なんだろうな

と環境の違いに身構えていたのですが、オープンキャンパスの研究発表会で自分の指導学生に指導教員自ら質問するという状況を見て、これは授業参観で自分の子供の発言に口をはさむ保護者のようなもので、この点では別に大した違いはないじゃないかと緊張が解ける一方、親という字は木の上に立ってみるって書くんですよ、という金八先生の言葉はかくも昔の話になり失せた、という思いに大学院という場で耽るのも隔世の感がいたします。大学院の社会的意義も近年大きく変化したということはあるでしょうが、そうした変化を横目に見つつも、自分の研究と院生の研究指導に日々精進して励んでいきたいと考える次第です。



アジア・アフリカ研究講座
講師

朱 琳

はじめまして、朱琳（シュ リン）と申します。

私は中国東部沿海地域の江蘇省南通市の出身です。父親の影響か、小さい頃から新聞記者になるのが夢でした。しかし、大学に入学したとき、結局父親の勧めで外国語学部を選択し、日本語を勉強し始めました。当時、英語以外にもうひとつ語学を勉強したいと思っていましたが、正直なところ大きな目標があって日本語を選択したわけではありません。その後、「もう少し日本のことを知りたいなあ」と軽い気持ちで大学院に入りましたが、堅い学問をする研究者として生計を立てていくとは夢にも思いませんでした。人生において、大きな目標に向かって計画的に歩む人もいますが、こうして振り返ると、私はむしろそのときどきの自分の気持ちと自然の流れに身をまかせて歩んできたように思います。こうした様々な偶然の積み重ねのうえに、私はここにいます。

専攻はアジア政治思想史です。修士課程では、もっぱら江戸思想史や美術史を勉強した

一方で、自分の問題関心は内藤湖南（1866－1934）や吉野作造（1878－1933）など明治～大正時代の知識人の政治思想にありました。そして、中国と日本の近代史は解きがたく絡み合っているため、研究を続けているうちに、思想文化および人的交流のつながりの深さに気づかされ、日中知識人の思想的連鎖に関心をもち始め、当該時期に日本と深く関わった梁啓超（1873－1929）など中国の知識人の動向にも目を向けるようになりました。どちらか一方の思想研究だけでは見えてこないものが、双方の鏡に映し出されることで見え始め、それぞれのもつ意味をより明確に捉えることができるようになります。博士論文は、内藤湖南と梁啓超という同時代を生きた日中の代表的な思想家をとりあげ、その中国史像と政治構想を連関させつつ解明し、比較を試みたものです。

中国に“読万卷書、行万里路（万卷の書を読み、万里の道を行く）”という言葉があります。勉強も必要ですが、それと同じくらい経験も大事だという意味です。私自身も中国

を離れてはじめて母国を客観的に見る事ができるようになり、日本と中国両方の国から二つの視点で相手の国を考えることができるようになりました。文献を読んだり、研究対象とする人物の故郷を訪ねたりしながら、その人の遺した足跡をたどるのが好きです。地元の記念館で、これまで公開されていなかっ

た資料を手にとって調べた結果、新たな事実を発見することもあり、歴史がそこにあるという実感と感動が湧いてきます。いままで私が南京から北京、そして東京、仙台へと場所を移して続けた研究の醍醐味は、このようなところにあるのかもしれませんが。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



国際日本研究講座 准教授
妙木 忍

2016年4月に国際日本研究講座に着任いたしました妙木忍と申します。前任校は北海道大学でした。札幌も大好きなまちでしたが、日ごとに仙台の魅力を感じています。東北の文化をより理解したく、宮城のこけし絵付け体験、秋田の曲げわっぱ弁当箱の手作り体験、岩手のチャグチャグ馬コの見学など、積極的にまちを歩いています。

学生時代は高知・京都・東京で過ごし、その間に約一年、札幌に暮らしました。高知では英語教育や英語学を、京都では英語学を、東京では社会学を専攻しました。博士論文研究では、戦後日本の思想遺産である「主婦論争」を研究しました。これは『女性同士の争いはなぜ起こるのか』という本になりました。2005年から細く長く続けてきたフィールド

ワークは、『秘宝館という文化装置』として刊行されました。この研究の原点に『遠野物語』があったこと、この研究で鍵となったのが医学展示だったことは、忘れられません。

現在は、イタリアやフランスの医学博物館における女性の身体表象に関する研究を進めています。特に、モンペリエ大学医学部にいるスリーピング・ヴィーナズに注目しています。また、民話や伝承とツーリズムの関係も研究したく、『遠野物語』にも関心を寄せ始めました。

全学の英語の授業も担当していますが、言語の奥深さへの関心は尽きることがなく、学生とともに考えることが楽しみです。大学院では学生の研究をさらに伸ばすことができるよう努力していきたいと思えます。



国際政治経済論講座 准教授
池田 亮

2016年4月1日に、国際政治経済論講座の准教授として着任いたしました、池田亮と申します。仙台はもちろん、東北地方に居住するのは初めてで、どのような生活になるか楽しみにしています。私は大阪の出身ですが、東京で大学生時代を過ごしました。修士課程以来、国際関係史を専攻しており、1999年からはロンドンのロンドン・スクール・オブ・エコノミクスにて博士課程に在籍しました。2006年に学位を取得した後、一橋大学に勤務し、その後2010年から大阪の関西外国語大学で研究および教育を行ってきました。

私は、北アフリカと中東の国際政治史を題材に、冷戦と脱植民地化の相互作用について研究しています。第二次世界大戦以前には第三世界の多くは西欧の植民地支配下にありましたが、冷戦期に相次いで新興国が独立を果

たすという、いわゆる脱植民地化が進行しました。この過程で米ソおよび西欧諸国の間でのどのような国際関係が展開され、どのように第三世界で主権国家体系を作り出していったのかが、私の研究関心です。具体的な研究テーマは、フランス保護国であったチュニジア・モロッコの独立過程と、西側同盟内の国際関係および冷戦との相互作用です。このような、脱植民地化と冷戦の相互作用に関しては、従来は主に米英関係の観点からなされることが多かったのですが、フランスを加えた米英仏関係を対象としている点が私の研究のオリジナリティだと考えています。このような歴史研究が提供する視点は、現代の先進資本主義国と途上国の間の関係を考察する上で、極めて重要だと言えます。

研究紹介

アメリカ民主主義の歴史的研究 — 白人性研究から人民主権論研究へ —

ヨーロッパ・アメリカ研究講座 教授 小原 豊志

これまで、私は主に19世紀のアメリカ合衆国における選挙権問題の展開を追跡してきました。一般的に普通選挙制は財産や納税、さらには性別による資格が徐々に撤廃されて実現にいたります。ところが、19世紀前半のアメリカでは白人男性については多くの州で普通選挙制が適用されたものの、それと同時に黒人からは選挙権が剥奪されたのです。なぜ、このような現象が起きたのでしょうか。この疑問を解明するにあたって私が注目したのは「白人性」whitenessという概念です。

白人性とは「白人」のさまざまな属性を指す概念ですが、この概念は人類の標準性の尺度として機能します。私は白人性研究の嚆矢となったデイヴィッド・R・ローディガーの著作、*The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class* (1999) を翻訳するなかで、この白人性概念を選挙権研究にも応用できるのではないかと考えました。ローディガーによれば、そもそも「白人」とは19

世紀初頭の労働民衆が「怠惰で隷属的な黒人」との対比で創りだした人種でした。こうすることで「白人」である自分たちが自立的な存在であることをアピールしようとしたのです。

こうした民衆の意識は選挙権問題にも反映していたと考えられます。そもそも選挙権は自立性を兼ね備えた有徳の者にのみ与えられる白人性を象徴する権利でしたから、選挙権の獲得こそ

民衆が自らの自立性を立証する確実な方法であったからです。しかし、その際に彼らは自らが「白人」であることを根拠に選挙権を要求したからこそ、黒人選挙権は徹底的に拒絶されなくてはならなかったのです。異人種間混交が禁じられたように、選挙権における人種混淆も避けなければならなかったのです。

現在はアメリカ民主主義の歴史を人民主権論という異なった観点から分析しています。目下、研究中なのは「ドアの反乱」Dorr Rebellionという1840年代初頭のロードアイランド州で起こった出来事です。この「反乱」はトマス・W・ドアを指導者とする勢力が展開した新政府設立の試みでした。その際に焦点となったのは選挙権問題でした。すなわち、既存の州政府は植民地期以来の土地所有者選挙権に固執しつづけたため、ドア勢力は人民主権論のもとに独自に州憲法を制定して白人男子普通選挙制を実現するとともに、ドアを州知事とする新政府を設立したのです。しかし、ドア政府は既存政府側の徹底的な弾圧策のもとで崩壊し、この出来事は「反乱」とみなされることになりました。

この「反乱」が興味深いのは、ドア勢力の行動は「反乱」ではなく、多数派を占める人民の意思を体現した「革命」ではないのかというアメリカ民主主義の本質に迫る問題を提起するからです。さらにいえば、憲法は誰のためにあり、その制定主体は誰なのか、その方法はいかなるものであるべきか、

という今日の問題をも提起するからです。現代の日本で改憲問題が権力側から提起され、権力側が主権者教育なるものを施している現状を見るにつけ、合衆国の小州で起こったこの「反乱」の研究は立憲主義を考えるうえでも有益なものと考えています。



写真2



写真1

■ 女の子の子した女の子は好きですか

言語科学研究講座 教授 小野 尚之

私は主に英語と日本語を対象にして、ことばの意味の研究をしています。言語学で意味の研究を行う分野を意味論と言いますが、私が興味をもって取り組んでいるのは、その中の「語彙意味論」と呼ばれる分野の研究です。語彙意味論とは、平たく言えば、単語の意味の研究です。一つ一つの単語がそれぞれ固有の意味と結びついていることは言うまでもないと思いますが、一つの単語がいつもただ一つの意味を表すとは限りません。たとえば、「新聞」は「テーブルの上にある新聞」と言ったときには印刷物ですが、「新聞は一斉に知事の不正を告発した」と言ったときにはメディアを表します。このように単語が複数の意味を表すことを多義と言います。実は私たちが使っていることばのほとんどは多義です。多義の時にはあいまいさを生じさせますが、表現の多様性を生み出し、豊かなコミュニケーション活動を支える人間言語の重要な特質です。私が一番興味を持っているのは、多義がどのように生じ、実際のコミュニケーションにおいて人が多義をどのようにして理解するのかという問題です。昨年(2015年)、この分野で現在進行中の研究を集めた論集を出版しました。



また最近では、理論的な研究よりも現象の面白さにより強く興味をもつようになりました。最近取り組んだのは、日本語の重複語と呼ばれる表現です。重複語(畳語とも言います)には、「山々、時々、広々、青々」のような一般語彙になるものと、「ドキドキ、スベスベ」のような擬音語・擬態語の類になるものの2種類ありますが、前者の語彙数は限られて

います。「人々」とは言えますが、「犬々」とは言えません。ところが、現代の日本語をよく観察すると、とても変わった重複語を目にします。たとえば「女の子の子したしぐさ」とか「コーヒーコーヒーしたコーヒー」のような表現です。こういった表現は日本語の語彙の中では非常に特殊で、たいていどんな名詞でもこのような表現にすることができます。「犬々」という表現はないと言いましたが、「犬犬した顔の犬」とか「猫猫したしぐさ」とかは言えます。しかも「犬犬した」というのは犬の複数とは無関係の意味を表します。このような表現に接すると、言語の創造性の核心に触れたようでうれしくなります。

もう一つ、現在私の研究活動で大きな位置を占めているのは「日本学」の研究プロジェクトです。これは昨年度から始まった学際科学フロンティア研究所によるプロジェクトですが、近いうちに東北大学の学際研究重点拠点の一つになる見通しです。これまで言語学の分野で研究者との交流はありましたが、このプロジェクトが始まってからは、歴史、文学、社会などの広い分野の研究者との交流をするようになりました。そういう意味では、今までの研究にも新鮮な目で見向き合えます。それにこのプロジェクトでは研究成果を社会にどう還元するのが強く求められていて、今まで思いもしなかったような発想が必要とされます。このプロジェクトが今後どのような花を咲かせるのか、今から楽しみます。

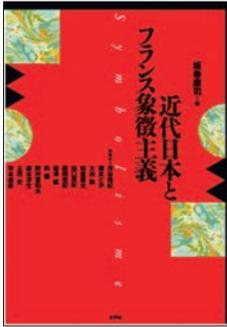


「日本学」研究プロジェクトのロゴマーク



最近の著作から

● 坂巻 康司 准教授



『近代日本と
フランス象徴主義』(編著)
水声社、2016年2月、408頁

日本におけるフランス象徴主義受容の嚆矢ともいべき上田敏の『海潮音』が刊行されてから100年以上が経過していますが、現在の文壇、論壇、詩壇にはその影響が隠然と残っているように感じられます。本書では、その受容状況の全貌に迫るという意図のもと、明治大正期における初期の受容（蒲原有明、野口米次郎、クローデル、堀口大祐）からマチネ・ポエティックの時代（中村真一郎、福永武彦、加藤周一）を経て、近代文学における創造的受容（梶井基次郎、萩原朔太郎、中原中也）と象徴主義を克服する試み（小林秀雄、田辺元、寺山修司）、そして現代詩（野村喜和夫）へと至る過程を13名の執筆者が考察しています。

本書のもとになったのは坂巻が主幹となって進めて来た科研費によるシンポジウムでした。シンポジウム当日には若手からベテランに至るフランス文学、日本文学、比較文学の研究者および実作者によって濃密な議論が展開されましたが、本書にはそのときの熱狂が反映されています。

● 江藤 裕之 教授



『英文法のエッセンス』
大修館、2015年10月、x+226頁

中学生の頃、英語の授業で現在完了形を習ったとき、「have+過去分詞」のhaveは「もっている」という意味ですかと教師に尋ねたら、そんなことは考えなくてよしいとの答えが返ってきた。どうでもよいことなのかもしれないが、英語を勉強していると、文法でも、発音でも、語の意味でもいろんな疑問がわいてくる。

その後、多少なりとも専門的に英語を勉強するようになって、私がそれまで英語に対して抱いていた多くの英語の疑問に答えるには、英語を歴史的、そして比較的に勉強することが有効であるとの確信に至った。「歴史的」とは英語史、とりわけ古英語を勉強することであり、「比較的」とは英語に近い言語、具体的にはドイツ語を学び、比較することであった。関口存男のドイツ語文典は英文法の「なぜ」に答える多くのヒントを与えてくれた。

本書は、英語を一通り勉強した人を対象にして、英文法を単なる暗記モノではなく、理解して使えるようにするための「読む英文法」を目指し、英文法の必要最低限の項目をエッセンスとポイントでまとめてみた。一般書なので、古英語やドイツ語などには触れていないが、読む人が読めばわかってくれると自画自賛している。

平成28年度科学研究費補助金採択一覧

氏名	研究種目	審査区分	研究課題名	備考
岡田 毅	基盤研究B	一般	タブレット端末を用いたブレンディッドeラーニングによる外国語教育プログラムの開発	
大河原知樹	基盤研究B	一般	債権法を用いた「現代中東法」のモデル化とその比較法的考察	
ナロック ハイコ	基盤研究B	一般	日本語と近隣言語における文法化の基礎的研究	新規
プシュパールディニル	基盤研究B	海外	日本、インドネシア及びスリランカにおける津波が発生しやすい地域の脆弱性評価	新規
杉浦 謙介	基盤研究C	一般	移動型多機能端末を活用した外国語教育—実践のための総合的研究—	
野村 啓介	基盤研究C	一般	フランス第二帝制下の地域権力に関する比較地域史研究	
石幡 直樹	基盤研究C	一般	メアリ・ウルストンクラフトに見られるピクチャレスク	
小野 尚之	基盤研究C	一般	生成語彙意味論に基づく名詞の事象性の日英比較研究	
池田 亮	基盤研究C	一般	1950年代中葉の中東における冷戦と脱植民地化	
佐藤 雪野	基盤研究C	一般	ナショナリズム・経済的利害・民族共生—戦間期チェコスロヴァキアの事例に学ぶ—	
勝山 稔	基盤研究C	一般	民間の視座を導入した中国通俗文芸受容史の構築—明治以後の民間翻訳をキーワードに—	
市川真理子	基盤研究C	一般	初期近代イギリス演劇における舞台のカーテンの使用方法に関する研究	
鈴木美津子	基盤研究C	一般	ロマン主義時代の英国小説に見られるインド表象	名誉教授
藤田 緑	基盤研究C	一般	局地戦争から読み解くアフリカ文学：ボスマンとングギを中心に	
高橋 大厚	基盤研究C	一般	日本語における人称格制約効果に関する研究	
渡邊 竜太	基盤研究C	一般	20世紀前半の中東欧多文化社会における社会的格差と地方財政	
小原 豊志	基盤研究C	一般	19世紀アメリカ合衆国における反知性主義と「人種」	
青木 俊明	基盤研究C	一般	社会的コンフリクトの解決にむけた可逆的意思決定の有効性とそのメカニズム	
佐藤 透	基盤研究C	一般	質的知覚論の再構築	
劉 庭秀	基盤研究C	一般	次世代自動車普及に伴う課題導出と対策に関する研究—適正処理と再資源化を中心に—	新規
佐藤 研一	基盤研究C	一般	啓蒙ヨーロッパ文学にみる非ヨーロッパの衝撃—ドイツとイギリスを中心にして	新規
藤田 恭子	基盤研究C	一般	ルーマニアのドイツ語話者諸集団のアイデンティティ形成とドイツ古典主義文学受容	新規
黒田 卓	基盤研究C	一般	ガーニャール朝末期イランにおける地方政権の興亡	新規
深澤百合子	基盤研究C	一般	擦文からアイヌへ食生活形成の考古学的研究	新規
吉田 栄人	基盤研究C	一般	メキシコにおける多文化主義と先住民の文学的实践	新規
山内 玲	若手研究B		人種とゴシック：フォークナーとワイドマンの小説の比較研究	
妙木 忍	若手研究B		医学展示における女性の身体表象の実証的研究—ヨーロッパと日本を事例として—	
佐野 正人	挑戦的萌芽研究		日韓歴史認識問題の起源と展開—戦後初期と1990年代を中心に—	
山下 博司	挑戦的萌芽研究		インド映画の“新しい波”「新中間層シネマ」の誕生—インド映画研究の確立を視野に—	新規
江藤 裕之	挑戦的萌芽研究		英語圏、準英語圏における英語アカデミックライティング教育の実際調査とその応用	新規
クラウタウ オリオン	研究活動スタート支援		日本仏教という観念—歴史・近代・国家	
目黒 志帆美	研究活動スタート支援		現代ハワイアンンの歴史的記憶とフラメリーモナーク・フェスティバルの検討を中心に—	
大谷 亨	特別研究員奨励費		中国における小人像の学際的研究—ビン南を中心とする南海文化との関係を手がかりに—	
ALIMU Tuoheti	特別研究員奨励費		日本における中国イスラーム研究史に関する調査研究	
陳 熙	特別研究員奨励費		マクロ的視点を活用した西洋思想の受容に関する解析的研究近代台湾の事例を中心として	

INFORMATION

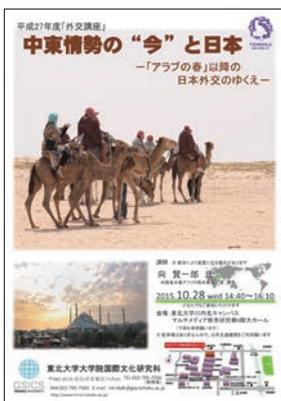
オープンキャンパス2016 報告

7月27日と28日の両日、オープンキャンパスが開催されました。国際文化研究科は昨年と同様、講義棟A棟の1階で研究科案内と留学生参加の行事、2階で研究科発表会を公開で行いました。今年は地下鉄東西線が開通して初めてのオープンキャンパスとなり、人の流れがどう変わるか心配でしたが、昨年とほぼ同じ人数の530



名の参加があり、最後まで順調に進めることができました。留学生を交えた行事と公開の発表会は、数年続けてきてほぼ定着した感がありますが、来年は少し新機軸を打ち出すことも考えた方がよいかもしれません。何かご意見がありましたらよろしくお願ひします。最後に、ご協力いただいた教職員学生の皆さん、ありがとうございました。(小野尚之)

平成27年度外交講座報告



10月28日、外務省より中東第一課長・向賢一郎氏を講師に迎えて、外交講座「中東情勢の「今」と日本」を開催した。時事的な外交問題を交え、中東諸国と日本との経済面での提携についてご紹介いただいた。

地政学上の要衝にあり、さらに石油・天然ガスなどのエネルギー資源を世界に供給する重要な地域、中東・北アフリカ地域において、2011年の「アラブの春」後に混乱が続いている。ISIL等過激主義組織の伸張やシリアの難民問題、イランの核問題、中東和平等、同地域を不安定化させる様々な課題はまだ十分な解決の糸口を見つけれないでいる。そういった時代の文脈を踏まえながら、「アラブの春」以降の中東情勢と日本の中東政策について、これまでの中東外交の成果とこれからの課題も含めて講演していただいた。

当日は本研究科以外からも学生・院生が来聴した他、一般

の来聴者も多く、両方を含めて60名あまりが参加した。講演の後には活発な質疑応答が行われた。(寺本成彦)

第22回国際文化基礎講座

第22回国際文化基礎講座は『「知」の国際文化学Ⅱ—近代と宗教』をテーマとして、平成27年11月7日、14日、28日の三回にわたって開催されました。近代以降、「神は死んだ」と言われますが、昨今の「イスラム国」の台頭を見れば、宗教は依然として人びとに大きな影響を与えているといえます。こうした問題意識のもとに、今回は近代社会の形成にあたって宗教が果たした役割を考察しました。第一回は小原豊志教授が「反知性主義とキリスト教—大衆の熱狂が生んだアメリカの知的状況—」でアメリカ福音主義の生成と展開を取り上げました。第二回は大河原知樹准教授が「近代社会とイスラーム法—モダニティーとの邂逅が生みだしたもの—」でイスラーム法体系の起源とその変容を取り上げました。第三回は「近代日本の仏教と「宗教」—明治期の言葉と西洋的なもの—」でクラウタウ・オリオン准教授が明治期の日本における「仏教」という宗教領域の形成を取り上げました。



今回もたくさんのお聴者をお迎えし、講座は盛況のうちに閉幕しました。(小原豊志)

第23回 東北大学国際文化学会の総会が開催されました

国際文化学会とは、学際的な研究を通じて独創的な知識を育てていくための組織です。「国際文化研究」という新しい学問分野では、人文や社会科学、自然科学の諸分野における伝統的な理論や分析方法を越えた、新しい研究アプローチが求められます。国際文化学会とは、さまざまな新しい研究アプローチを追究する研究者たちの集まりだといえます。

この学会の第23回総会が、去る平成26年7月27日(水)、東北大学・川内北キャンパス国際文化研究科1階会議室において開催されました。昨年度に引き続き大会の開催がなかったため、総会のみ開催となりました。総会では例年通り、活動報告、会計報告、監査報告、次年度予算案、次年度事業予定などの確認がありました。また、次年度である2016年度の学会活動について活発な意見交換が行われました。現在、この学会は研究力の強化を図っています。引き続き皆さまの協力をお願いいたします。(勝間田弘)

INFORMATION

講演会報告 (1)
「食のグローバル化—コロンブス以後のワインについて考える—」

日時：2016年2月19日(金)15:00～18:00
場所：東北大学川内北キャンパス マルチメディア
教育研究棟6F大ホール
講演者：野澤丈二（帝京大学経済学部専任講師）

平成27年度の科長裁量経費をいただき、学術講演会「(第1回) 美食のヨーロッパ文化学」を開催しました。今回は帝京大学の野澤丈二先生を講師にお迎えし、ワイン文化をめぐるグローバル化の歴史と、そこでの日本とのかかわりについて、高い学術的レベルはそのままに、それでいて平易に解説していただきました。氏はワイン文化史研究の第一線で活躍されており、オランダ東インド会社によるワインとその文化のアジアへの普及など、近世交流史の諸問題に関してご研究されています。講演内容は、豊富な一次史料にもとづいた緻密な分析を基礎とするもので、まさに圧巻というにふさわしく、50名を超える来場者が熱心



に聞き入りました。なかでも、ワインが中央アジア（カフカス地域）を発祥とするにもかかわらず、「なぜヨーロッパの飲料とみなされているのか」という問題提起は、聴衆の知的好奇心を大いに刺激したようです。

(野村啓介)

講演会報告 (2)
ワークショップ「英語学三講」

平成28年3月10日、織田哲司氏（東京理科大学教授、英語学）と古田直肇氏（東洋大学准教授、英語教育学）をお招きし、本研究科の江藤裕之の3名を講師とするワークショップ「英語学三講」が開催されました。まず、江藤が「規範文法・伝統文法と何か一書くための英文法を考える」で、「文法的な正しさ」とは何か、それは何を基準としているのかを問いかけ、それを受けて古田氏が「英文法は役に立つ—記述文法と規範文法の融合に向けて」で伝統的な規範文法の再評価を試みました。両者に共通する点は、単に「通じればよい」のではなく、英語により正確に伝えるためには、「古い」規範文法が有益であるとの視点でした。織田氏は「語源から垣間見る基本語彙の背景—giftをめぐる円環の世界観」という発表で、英語の基本語彙の歴史に秘められた人々の精神の歴史へと私たちを誘ってくれました。このような知識は英語の習得には直接に役立つものではありませんが、ことばを見つめるまなざしや外国文化への接し方に変化を与えることと思います。

(江藤裕之)



入学を希望される皆様へ

次の入学試験（春季入試）は、
平成29年2月16日(木)、17日(金)に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台上で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

詳しい入試情報については、本研究科ホームページ
<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/admission/information.html>
をご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先

東北大学国際文化研究科教務係
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583
E-mail: int-kkdk@grp.tohoku.ac.jp

編集後記

国際文化研究科広報『GLOBE』第29号をお届けいたします。前号に引き続き、平成27年度に再編された新しい講座から、三つの講座を紹介しました。また、去年は2名の新任の先生をお迎えしましたが、今年は2倍の4名の新任の先生をお迎えし、国際文化研究科のスタッフも若返り、新鮮な顔ぶれになりました。それぞれ個性的な「新任教員紹介」をどうぞお見逃しなく。例年同様、修了生の皆さま、教員の皆さま、お忙しいところをご寄稿いただき、ありがとうございました。次号で30号を迎える『GLOBE』を今後ともよろしく願い申し上げます。

(編集担当)